

福島県立安積高等学校



安積高等学校旧本館

沿革・概要

明治17年に、福島県福島中学校として創立され、昭和23年、学制改革により現校名となる。今年で118周年を迎えた、福島県内で最も古い歴史と伝統をもつ学校であり、県内屈指の進学校である。卒業生は2万8千人余を数え、国内はもとより世界的にも活躍した学者・文豪をはじめ、数多くの有為な人材を送り出している。

校門を入るとすぐ、旧校舎であり国の重要文化財に指定されている安積歴史博物館がある。明治を象徴する鹿鳴館風白亜の木造二階建て旧校舎の講堂は、現在でも学年集会等で利用されている。本校の歴史の重さを在校生に伝える役目を果たすとともに、安積魂の根源となっている。

平成13年度に男子校から男女共学校となり、今年度は文部科学省からスーパーサイエンスハイスクールの指定を受けた。

自由な校風と輝かしい歴史と伝統を継承しつつ、世界の未来を担う人材の育成を目指し、新しい世紀に挑戦している。

求める生徒像

- ・学ぶ意欲に溢れ、4年制大学進学を希望し、勉学を通して更に自己を高めたいと強く希望している者
- ・いかなる場面でも自律的に行動でき、同時に他と協調しつつ、人間性を磨こうと努力している者

教育方針

- ・個性を伸長する
- ・知性と情操と実践力を養う
- ・自主自律の精神を培う
- ・質実にして真摯な人物を養成する

安積の精神

- ・開拓者精神
- ・質実にして真摯
- ・文武両道

校訓の意味合いを持つこの3つの安積の精神のもとに、生徒、教師ともにお互い刺激し合い、強い絆が生まれる。その中でも、特に文武両道に基づく人間教育は、時代が変わっても本校教育の基礎になっており、地域社会から強い信頼が寄せられている。

校内模試を徹底活用した進路指導

本校の進路指導の核になっているのが、年4回、3年生全員に対して実施している校内模試である。平日の放課後や土曜日に、1週間から10日間にわたって連続して行われる模試の問題は、本校独自の問題であり、各教科が検討に検討を重ねた結果出来あがる。完全週5日制の導入により、各教科とも作問検討会の時間を捻出するのに苦労しながらも、本校生の多くが希望する大学の、主に、個別学力試験レベルに的を絞った問題を作成している。これによって、生徒はもちろん、教員の力も確実につけられるのである。

文武両道を実現するため、1、2年の間はできる限り部活動が続けられる環境を整えながら、高い進路目標を維持させる努力をしている。進路指導部による、全生徒に対する学習時間調査や進路希望調査は、単なるデータにとどまらず、その結果は、生徒同士の意見交換や進路意識の高揚の役割も果たしている。部活動との両立という点から見ると、ある意味で教員はじっと我慢を強いられる場面もあるが、前年度卒業生が執筆する合格体験記には、例年、部活動と大学受験を見事に両立させた先輩による文章も数多く掲載され、大きな励ましとなっている。また、各学年集会においても、大学在学中の先輩を招

いての講演会や、大学ごとの懇談会を開くなど、生徒の心に、より響くものを実施している。そして、その生徒たちを、部活動引退後、全員一丸となって受験勉強に向かわせる役目をしているのが校内模試である。

第1回校内模試を境に、どの生徒も私たちがびっくりするほど受験生の意識へと大きく変わる。ある時期の放課後になると、3年生の廊下に「ただいま試験中、静かに！」という立て札が立ち、1、2年生は、日が暮れるまで必死で問題を解く3年生の姿を目の当たりにする。このようにして、上級生からこの模試の重要性が無言のうちに語られ、生徒たちは無意識のうちに、この模試は実力をつけるための試験であることを認識するようになる。無論、問題及び模範解答は、試験終了後、直ちに校内に掲示され、3年生のみならず1、2年生も、その内容を垣間見ることができる。さらに、これは校内模試集成として、教科・科目ごとに冊子となり、1、2年生の教室に配布される。ちなみに第4回模試は、例年、2年生もチャレンジしている。さて、3年生の5、6月と言えば、ともすれば模試の位置づけが「全国偏差値や合格可能性を見るもの」と思いこみがちになる時期である。作問者である教師と本格的に受験期を迎える生徒が、校内模試を通じて、真正面から向き合い、生徒は教師が何を要求しているのか把握できるようになり、また、教師も、生徒の学力を把握できるとともに、指導内容を確認しその後の指導に生かす好材料とすることができる。

蓄積されたデータは、生徒が真剣に取り組んだ試験のため非常に有効性を発揮する。受験前の12月、この模試の結果を中心に3年生全生徒の全志望大学について合否判定会を行い、最終受験校決定の大事な資料となる。その後、大学入試合否データ集、校内模試大学別合否状況集などの冊子として利用され、最後に校内大学入試情報交換会の貴重な資料となる。3年間の取り組み、主要大学の合否分析など当学年の進路指導の詳細を他の学年に伝えるこの入試情報交換会は、本校の進路指導において非常に重要な役割を担っている。無論、例年のことながら、希望を達成できず、浪人を余儀なくされる生徒も少なからずいるが、本校では、事後指導として当該学年担任団が年2回予備校などを訪れ、その後の様子や今後についての意見交換を行うなどの努力も重ねている。



週5日制にともなう学校開放

50分授業で週32時間の時間割を2期制で実施しているが、単位数不足を、次のような共通理解のもとで土曜日の学校開放により補っている。

- ・最低2名の責任教師を常駐させ、8:40～14:00の間、校舎を開放する。

- ・生徒の希望により講座の開講もありうる。開講する場合は特別講習会の時間帯に準じて実施する。また、受講しない生徒が不利にならないように配慮する。

この共通理解の下で、現在、1年生に対して、授業で不足する分野の補充、既習内容定着目的の問題集解説、基本を重視した復習・反復演習など各教科の特性に応じる形で英・数・国の講座を開講している。また、3年生に対しては、模試等がない土曜日は自学自習の場所とし各教室の利用を奨励し、2年生に対しては、自学自習の手助けをするため、特定の科目の講座を開講している。

スーパーサイエンスハイスクール

理科・数学教育を重点的に行う研究開発学校として、今春、文部科学省から指定を受ける。大学教授による授業、研究所での研修などが具体化され、現在、それを展開中である。本校としては、この事業を通し、理数系ばかりでなく文系も含め、学校全体を活性化させることを企図している。

1. 事業の目的

大学等との連携を図り、特に理系に進学を希望する生徒に対し、基礎的な自然科学概念の形成を早期に図り、生徒の有する科学的資質・能力を最大限に引き出す理数系教育を展開する。

2. 事業の方法

(1) 研究開発の概要

大学や関係機関との連携・支援のもと、自然科学に対する興味・関心及び意識の高揚を図るとともに、高等学校段階での自然科学の基礎概念の早期修得ならびに現代自然科学の知識や技術を習得させるためのカリキュラム開発について研究を行う。

(2) 平成14年度実施規模

全校生徒を対象に実施する。1学年は全クラス(10クラス400名)、2・3学年については理型クラス(2学年5クラス216名、3学年6クラス226名)を中心として実施する。ただし、具体的な研究事項・実践内容によっては希望者を対象にする。

(3) 研究開発内容

(i) 大学等と連携し、自然科学に関する興味・関心を高め、科学的資質・能力を育成する。また、科学者として必要な英語による話す力、聞く力、表現力などの英語力の育成に関する実践的な研究を行う。

●福島大学

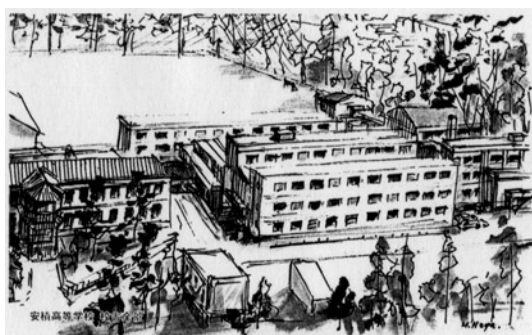
- ①大学教授による解析学の講義
- ②大学教授による量子化学に関する講義及び自然科学に関する講演
- ③大学教授による天文学に関する講義
- ④機器計測を活用した、「授業と生徒実験の融合を目指す研究」ならびに「放課後ラボラトリーの実践研究」
- ⑤H α 線による太陽観測

●福島県立会津大学

- ⑥大学教授による微積分学の英語による講義
- ⑦大学教授による数学学習プログラムを用いた空間認識に関する演習・講義
- ⑧大学教授による計算機物理学に関する講義
- ⑨会津大学と連携し、科学技術分野について英語によるプレゼンテーション講義演習

●福島県立医科大学

- ⑩大学及び地元企業との連携のもと、細胞生物学の講義及びDNA分子構造モデル作成



●日本大学工学部

- ⑪ロボット工学の理論・技術を習得するための実習
- ⑫航空工学の理論・技術を習得するための実習
- ⑬「錯塩の合成と分析」「有機化合物の同定、定性分析」等、大学教養課程レベルの実験

●東北大学

- ⑭大学教授による原子核と素粒子に関する講義

●その他

- ⑮科学者による講演「創造することの喜び」
- ⑯企業人による講義・講演「E Q 概論とサイエンス」

(ii) 運営指導委員会より指導助言を受け、事業についての計画・評価を行う。

おわりに

男女共学になったのを機に、制服を定めず、学びの場にふさわしい服を生徒に自己決定させるようになった。このことは、福島県内においては非常に珍しいことである。本校の自由な校風、生徒の個性を伸ばし自主自律の精神を培わせたい教師の願いとともに、その期待に応えられる生徒がいる学校であるからできたのかもしれない。週5日制の現在も、従来の生徒会行事をはじめ、本校ならではの生徒の活動を大切にするなど、公立高校としてのオーソドックスなスタイルを守りつつ、地域から厚い信頼を受けている進学校として、学力向上をはかる努力を続けている。

(文責 福島県立安積高等学校教諭 山田佳博)